

一

次の――線部の読みをひらがなで書きなさい。

- 1 怪しい風体の男。
- 2 清濁合わせのむ器量。
- 3 師の教えに背く。
- 4 待遇に不満を持つ。
- 5 雑貨を商う。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 社会のシユクズ。
- 2 星がマタタク。
- 3 ムし暑い氣候。
- 4 モハンとなる行為。
- 5 ウムを言わせぬ態度。

三

次のA～Eのそれぞれの中で、一つだけ他と種類の異なることがありますが、それを選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|---------|---------|---------|----------|----------|
| A | ア 丑 | イ 丙 | ウ 辰 | エ 未 | オ 亥 |
| B | ア おばな | イ なでしこ | ウ せり | エ おみなえし | オ ききょう |
| C | ア 拝啓 | イ 早々 | ウ 敬具 | エ 頓首 | オ 不 |
| D | ア 御覧になる | イ おっしゃる | ウ 拝見する | エ お越しになる | オ いらっしゃる |
| E | ア うんざりだ | イ しずかだ | ウ おだやかだ | エ あわれだ | オ きれいだ |

四

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

自然体の中心をなすのは腰と肚である。かつての日本人が腰と肚に対する身体の意識を強くもっていたことは、たとえば「帯」の存在によって知られる。相撲のまわしや帯は、腰肚文化の象徴である。腰骨と下腹部を巻いて締められた帯によって、腰と肚は意識しやすくなる。力をこめるときに息をぐつと溜めると、腰と下腹部に力が入る。

帯は腹が^{ひら}拡がる力に抵抗する。この帯の抵抗は、^①力を殺すものではなく、^a1 腹の力を引き出す働きをしている。帯があることによって下腹部が前に張られれば、腰骨のところが引き締められる。腹が張られるときには、^A意識が同時に生まれる。

帯は腰骨と腹を結びつけると同時に、からだの周囲に巻かれることによって、^b2 〈幹の感覚〉をあたえる。神社など木に綱が巻かれ、聖なる樹木とされていることがよくある。横綱の土俵入りはまさに、樹木が地に生えている感を呈している。帯を下腹にぐつと締めることによって、からだの木の幹のようにしっかりと感ぜられやすい。自分のからだを木の幹のように感じるというのは、心地よい感覚である。^c「体幹」という言葉があるが、まさに幹としてのからだの感覚を育てるのが帯やまわしであった。

最近、私は二〇代の青年たちと同宿する機会があり、^③ひとつ驚いたことがある。それは、宿の浴衣を着たときに彼らが、帯をみずおちのあたりに巻いていたことである。みずおちとは、胸と腹の間の少しへこんだ部分のことであり、かつての日本^dでいえば、そのようなへそより上の位置の帯の締め方は、男子では子どもの締め方である。体格のいい青年が、子どもの帯位置で帯を締めていることに^④対して何の疑問も抱いていないのは、不思議な光景であった。

これは、たとえば着物のたたみ方を知っているかどうかなどということとは少々次元の異なる問題である。^⑤仕きたりや作法や生活上の細かな段どりは、時代によって移り変わるものである。それを知らない若者があらわれたとしても、別段驚くほどのことはない。³帯を締める位置は、身体感覚に直接関わる問題である。腰と下腹を結ぶようにきゅつと締めたときの落ち着いた充

実感は、みずおちあたりに巻いては得ることができない。帯の位置が上にずれたことは、腰肚の感覚が衰退したことを意味している。

^⑥4、子どもから大人に変わるときに帯の位置が下にさがるといふ風習が忘れられていることも、意外に重大な変化である。大人への境界線の越え方はさまざまにある。その中でも、子どもから大人への通過儀礼の中心として身体的な修業が課せられることは、かつては多くの社会で見られたことであった。近代化にともなう身体的な鍛錬をともなう明確な通過儀礼は減少してきた。^⑦帯の位置は、子どもから大人へのたんなる記号的な変化ではない。大人になればネクタイを締めるといった次元とは異なり、帯の位置には、大人としてもとめられる身心の感覚がこめられているのである。

子どもには人生を跳ねるように生きる特性がある。そうした弾む生のスタイルの時期には、帯をあまり下げないようにしておき、大人になるべきときが来たら帯を下げるというのは、優れた工夫である。子どもから大人への境界線は、かつての日本の男子の場合、へその上から下へ帯が移動することにあつたとも言える。それだけに、いい年をした大人がみずおちあたりに帯を巻いて落ち着かなさを感じないというのが私には驚きであった。そのときは、見ている私のほうが落ち着かなさを感じてしまい、その場で直してもらったほどである。

(斎藤孝「身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生」より)

問一 ―線部①「力を殺す」の「殺す」と同じ意味で使われているものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 消毒液で菌を殺す。

イ 生かすも殺すも自由だ。

ウ 糸屋の娘は目で殺す。

エ 食材の持ち味を殺す。

オ ランナーをセカンドで殺す。

問二 ―線部aの「で」と同じ働きのものを本文中の―線部b～fから一つ選び、記号で答えなさい。

問三

1	4
---	---

 のそれぞれに、次のア～オの中から最も適当な語を選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア だから イ しかも ウ しかし エ むしろ オ いわば

問四

A

 に入る最も適当な語句を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 腰を上げる イ 腰が引ける ウ 腰を浮かす エ 腰を割る オ 腰が決まる

問五 ―線部②「感を呈している」の意味として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 感覚を伝えている イ 緊張感を示している ウ 神秘性をかもしだしている

エ 心地よさを与えている オ 雰囲気であらわしている

問六 ―線部③「ひとつ驚いたことがある」とあるが、それはなぜですか。「～から。」に続く形で本文中から二十五字以上三十五字以内で書き抜きなさい。(句読点・符号も一字とします。)

問七 ―線部④「何の疑問も抱いていない」のはなぜですか。「～から。」に続く形で本文中から十字で書き抜きなさい。(句読点・符号も一字とします。)

問八 ―線部⑤「仕きたりや作法や生活上の細かな段どり」の具体例としてどのようなものがあげられていますか。「～こと。」につながる形で二つ書き抜きなさい。

問九 ―線部⑥「子どもから大人に変わるときに帯の位置が下にさがる」という内容を否定的な表現で説明している一文を本文中より探し、最初と最後の五字で答えなさい。(句読点・符号も一字とします。)

問十——線部⑦「帯の位置には、大人としてもめられる身心の感覚がこめられている」とはどういうことですか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 帯の結び方が自然体につながるだけでなく、大人としての強くたくましい精神力をも表すということ。
 イ 帯の位置は時代によって移り変わるものであるが、生きる心構えは今も昔も同じであるということ。
 ウ 帯のある位置が胸と腹の間という単に体の中心を表すだけでなく、心の中心をも示しているということ。
 エ 帯の位置によって体がしつかりとしたものとして感じられるだけでなく、心も揺るがなくなること。
 オ 帯を巻くことで体に幹の感覚を与え、その感覚が心の芯を引き締めることにも通じること。

五

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。（※本文中の漢字の読みは、作品尊重の立場から、原作の読みにしたがっています。）

学校を了えたのは四時頃であつた。T先生は弁当箱を一つ持って外へ出た。短い冬の日はまだ学校のすぐ横手の山に没して、山根の雪に薄いアをとかしていた。この高台から見える町はじーとおびえているように少しも活気がなかった——もう電灯がまたたいている。海は、冬の陰気なそして凄じとするような雲の色をうつして波一つなく、それに港内の汽船までが動かないので、何んとかなく不気味な凍えた沈黙がしめていた。

先生にはそんな冬の北海道の陰気なのを見るとすぐ満洲へ出兵していたときの事が思い出されるのであつた。——今もちょっと、満洲の霜枯れた広野を行進した一シーンを思い出した。が、さっきの事が彼のあらゆるものを陰鬱へと導いた。T先生は腰がずきずきするのをこらえながらスキーをはき始めた。金具に手が吸ひ着く位寒さがひどかつた。皆んな帰ってしまった校舎は静かであつた、その静間に金具の1する音は随分淋しくひびいた。皮をしめるときはもう彼の指の感覚がなくなつてしまった。何んとか自分の気力のなくなつたことが、しみじみと思ひ出された。

T先生は2した雪を分けて進んだ。小さい川の斜面を過ぎて、落葉松の並木を越すとゆるやかな傾斜があつた。T先生はそこを気持ちよく滑走した。ここからやや広い天狗山の麓まで、いつでも天狗おろしの寒い風がさえぎるものがないこの広場を吹いていた。若い時は一町も歩けば体が3して来るのに、彼の体はだんだん底びえがする様に冷たくなって行くのであつた。彼はその鋭い風に対して身体を縮めるようにして受けながら、気力のないすべり方を続けた。弾丸をうけた腰のいたみはひどくなる一方であつた。耳はへんにこわばつてと……（と意識しているうちはよかったが）もう感覚がなくなつてしまった。この広い麓野は上皮的粉雪が吹きとばされてカサカサした固い表面であつたので、スキーは横へ流れ勝ちであつた。その度に大きな体はうば木の倒れるように中心を失つた。それを調子よくもとに帰することが出来なくて4とあわてた。

（「うば木」これ位T軍曹——この廃類し切つた姿を実際よく表わしているものがないと、同時にだんだん内実の熱を失いかけて

ゆく彼はまったくうぼ木そのものであった。

彼が町へ入ったときふと立ち止まった。そしてふり返つてみた。すすけた様な白さに塗られた学校が高台の雪にうずもれて見え

た。

「……これからあの学校へこうやって行けるかどうか……」
彼はさつきからその事について考えていた。彼は両手で耳を抑えてぬくめた。何か 5 した自分のものでないようなものを、つかんでいる様な不気味さを感じた。頬の皮が 6 と痛んだ。

先生の家はこの辺の所謂「マッチ箱」の町にあった——同じ建方の家が幾列も幾列も規則正しく並んでいるのであった。多く銀行員とか会社員であつたが、彼のうちはその端れで裏は未墾地の草藪に続いているみすばらしいすすけた三軒長屋であつた。彼はずきずきと弾丸のあたつた腰が、底の方から痛むのを我慢しながら、やつと家の前へきた。家では健一と啓二が喧嘩している大きな声と、 7 と走り廻る音が聞えてきた。

「又……」

そう云つて彼はチェツと舌つづみをした。

彼は跣で金具をはずし始めた。が凍えた手は自由にならず、力が少しも入らなかった。彼の頭には 8 と腹だたしさが湧いてきた。彼は杖をほうり出して、

「健っ!! ……」と叫んだ。

もつれ合つて喧嘩している影のうつっている障子をにらんだ。いつもの恐ろしい声をきいて健一は 9 と障子をあけて飛んできた。

「お父ちゃん? ……お帰り、何あに」

「解け、これを」

彼は金具をがちやがちやさせて知らした。健一は一度親父の顔をうかがうようにして、だまつて解き始めた。

「……ひやつこい、雪がこんなに……」

彼は知らん振りして破れたポケットに手を突込んでいた。

「お母さんいるか」

健一は顔をあげて、

「うん」

がその不機嫌なのを見て、何か云おうとしたがやめた。

「……いつまでやるんだ! 寒いのに、馬鹿っ」

彼は叫んだ。健一は 10 手を早く動かした。

T先生は裏口にスキーを立てかけて家へ入った。

たった一つの八畳はごやごやに取り散らされている——啓二の絵本、まくら、紙屑、座蒲団などがその辺に投げ出されている。彼の心はまたむかむかになった。そして炉辺に坐ると、やけに煙管を炉ぶちに打ち当てた。つめるにはつめたものの粉ばかりの煙草は、火をつけようと炭火に持つて行けば、こぼれて燃えた。健一と啓二は、又何か云い争っている……彼は何かどなつてやりたい気持ちになった。彼はじつとしてしていると今日、学校であつたことが考えられてならなかった。

「おっ母さんはどうしたい?」

彼は子供たちに云った。

「はい……」

台所の方から妻の返事が聞えてきた。

「おやお帰り……」

「何に！」

「……」

「馬鹿……」

彼はひくく投げるように云った、そしてだまってしまった。妻も何も云わない……

今日のこと、がなかったとしても、彼は学校にいるときと、家にこうして坐っているときと、そのあまりに心持に変化が出来るのに驚いた。家にいると、眼に入るものが皆彼の心を高ぶらせないものがなかった——不満であった。責められるようであった。が学校で若い生徒に号令をかけているときは、華やかな軍人に帰ったような快楽を味わうのであった。それでいさましい出征中の話をしたりして、老廃した自分を昔に帰したかった。だから体操の時間は少なくともそんな意味に於て、彼にとっては楽しいものであった。

この前学校で画の展覧会があったときに、漫画が貼られた——それは先生全部をかいいたので一番人気があった。その前は生徒で一杯だった。その漫画は五寸四方位で、紺色の台紙にはりつけられて、下に短い説明がついていた。

「おい。見ろ」

「『ご縁がありまして……』だと。M先生が新任式に云った言葉だねえ」

そんな言葉で室が騒々しかった。その外に「今様殿上人……」などはS先生で女のようなにやけた顔が書かれていた。が最も人気のあるのはT先生であったのだ。彼の渾名は「山火事」というので、頭は病気で禿げたのか所々二三本位の毛しか残っていなかった。が変なことには、顔中は鬚だらけであることである。

「先生は反対に取り変えればよかったのに……」

と生徒は笑いながら彼にからかった。

「ふーん……」

彼は長い顎ひげをしごきながらかすかに笑った。そして次に手ざわりの全く異った頭をくると撫でるのであった。

「何んでもかんでも摩天嶺と乃木大将を引っぱり出す……」

と漫画の下に説明がかかっていた。

彼はよく体操の時間中に坐らせて、日露戦争のときの話をきかした。その中には必ず摩天嶺という語が出てくるのであった。終いには、

「先生摩天嶺の話を教えて下さい」

とどんな異った話にでも冗談を云った。先生もただ笑ってしまった。

所がT先生が士官学校へ入学するとき、準備を乃木大将の家で息子たちと一緒にしたと云って、その時の話をした。乃木大将の家にいたということが生徒の興味をそそった。ある時などは大将の愛していた馬の尻に石を投げて怪我をさせて非常に叱られたという話をもした。

兎に角T先生は軍人的な単純さを持った典型的なタイプの人であった。そうした性格は多くの生徒に愛された。……

生徒が漫画の前で騒いでいたとき二人の先生が入ってきた。自分をどんな風に書かれているかという変な顔つきをして入ってきた。

「先生の一番素敵です」

「そうだ。矢張り先生の顔に変な毛が出ているなあ……」

そんなことを高い声で云った。

先生は変ににやにやしながら自分ののをのぞき込んだ。生徒は少し息を沈めた。一人はむっとした。生徒は何かしら期待がはずれた様な呆気なさを覚えてだまった。もう一人は苦笑をした。がT先生が顔を出したとき、

「やあ先生待っていました」

「何にしる先生のが一番傑作だからなあ」

「どうだ先生の顔……いや頭のいいこと」

普段から怒ったことのない先生なので生徒は色々冗談口をたたいた。先生はにこにこして、

「どんなのだい……ええ」

とのそりのそり歩いてきたが、

「他の先生のから順に見て行こう」

と始めから順に見出した。

「これじゃ君伊藤君可愛相だて……『お坊っちゃん』なんて……」

次の方をのぞいて、

「が、中桐君は素敵だ……ハハハハハ」

そう云って此度はT先生は自分の前に立った。

「やあ！ これあひどい。これが俺の頭か。悲観したなあ（頭をかいて）……何んだ、摩天嶺と乃木大将って？ ウフフフフ」

彼はすっかり笑ってしまった。

「先生一番愛嬌がありますねえ……」

さっきの先生に反感のあったものが云った。

「お互に怒ったってつまらないよ……が随分うまい……」

こうして生徒と他愛もなく騒いだ——或は幾分彼の現在の苦しい境遇を忘れようとするように勉めていられるらしい所がないでもなかったが、どのみち凡てを忘れることが出来て幸福であった。

それが彼の家に来ると全く如何にもみにくい自分を意識するように、破れた壁、がやがやと騒ぐ子供等、……そんなものが待ちぶせていたのであった。④全くこれ見よとばかりに。それに今日の事が加わって彼はどうすることも出来なくなった。

「酒……酒があるか？」

「何んですねえ……お飯時でもないのに」

台所から妻がぬれ手を前垂れでふきながら、顔をしかめて出てきた。

「何んでもいい……飲む」

彼は振返りもしないで、投げるようにして云った。妻は又始まったという風に、用意をした。彼はものも云わないで飲んだが、益々頭が妙にさえてきた——そのくせ（中略）ずきずきと痛んだ。と、今日の話が又鋭く彼をせめつけてきた。

T先生は二時間目の体操を終えて、教員室に帰ってきたときストーヴのまわりで先生達が何か話し合っていた。直感から何かしら重大なことであることを知った。彼は後から手をさしのべて、話口を自分に向けて欲しいような人がするように、

「……随分寒い……」と云った。

「さあお入りなさい」

と一人が席をゆずった。

「何んです……大分お話がもてますね」

ストーヴの上にかざしている手をもみながら、一まわり見廻した。

「何あに……校長先生が変るんですて」

「ええ……校長先生が？」

彼には少なくとも重大な事件であった。彼は心から驚いた。驚き！ それは単なる驚きではなかった、——恐怖、不安。外の先生は彼のそうしたことを知らなかった……が矢張り彼等にも相当の不安、恐怖があった。

「どんな人なんでしょうかね」

「さあ……」

するとMという主席が、

「非常に厳格な人だという事ですって」

「そうですか……」

皆んなはその先生に顔をむけた。

「で、容赦なく淘汰をするという話ですよ……僕の友だちが近づきでしてねえ」

意地の悪いMはそう云って、貧弱な先生に皮肉な視線をやった。その一つがT先生に向けられた様に彼は思った……

足が自由でなくて、よく走れない自分が体操教師であることは、感謝したつてしようのあるものではなかった。幸いに彼の単純な、邪気のない性格が校長に愛されていた。その校長を彼が失わねばならぬということは彼にとって重大なことではなくて何んであろう。

月に二三通の体操教師の願書は来ないことがなかった。しかもそのいずれもが若い少尉、中尉であった。それを一通りは校長に見せなければならぬ時、彼は不安におののいたのであった。願書には皆「身体健全ニシテ品行方正……」の文句が彼をおびやすうにかかれてあった。彼の足が不自由であることは勿論であったが、毎朝酒臭いという事も大分教員の間にも話題に上つたのであった。今その校長を失うことは、あまりにも明かに彼の前途を決定せしむるものであった。彼は悩んだ……

彼はその事が頭に浮かんでくるともう酔えなかった。反って顔がだんだん青白くなってゆくのであった。

「貴方どうしたの……」

あまり沈みながら、ちびりちびり飲んでいたので妻は不審に思つてきいた。が彼は返事をするのさえうるさかった。(癪にもさわつた。)

夕飯は薄暗い電灯の下に小さいテーブルの上に出された。二人の子供はせわしく食ったが、彼等は何かしら父の静かな、そして苦々しい顔をのぞきのぞきいつものように騒がなかった。母はじーっとただお給仕するのみであった。——いかにもやつれた様なほっそりした肩である。それに、父の無暗に肩のはった影は障子に、さんのためにその所がゆがんでうつっている。子供らは「お飯」という声さえはばかった。

お飯が済んでテーブルがのけられると、そのあとにもう二人はごろ寝をしてしまった。妻は夫のそばの炉端に縫物を出して始めた。彼はその手元を見つめていた。

「おい……今度校長が変るよ」

彼はふとそう云った。——答は望まなかった、ただむしろ自分に云ったという風であった。

「校長さんが、あの……」

「……………」

彼はだまつてうなずいて見せた。

「困りますねえ……今度」

「……………」

彼はどうすればいいかが聞きたかったのであった。(がそれは実際し様のあるものではなかった。)

「もう寝る」

寒さは容赦なくもれて来た。八畳は箆笥や炉や何かをのぞくとあまりに残っていないかった。そこへ三枚の薄い汚れた蒲団がしかれた——一緒にくつつけて、そして二人の子供を中央に四人がかたまつて寝るのであった。薄い掛蒲団の上には彼のきれた洋服や平常着がかけられた。彼は小さい無心に眠っている啓二を抱いているうちに涙がでてきた。

「生きるためだ、仕方がない……」

T先生は、一つの事に打ち当たった。それは如何にも卑劣なことであった。昔どしどし正しいことのためには上官と喧嘩した氣概がなつかしかった。

妻は時々火をかき起しながら、薄暗い電灯の下で着物を縫っている。表をあるく人がときどき下駄のこぶを角の電信柱に払う音がきこえてきた。

新しい校長が来てからのT先生の態度は一変した。^⑨ 皆んなは驚異の眼を放った。お株の摩天嶺も乃木大将も一言も出なかった。そして号令は妙にかく張って、体操はもうただ無意味な行進と、重い鉄砲のみとなった。

「お前は どうしてゲートルをつけぬ」

そうした服装のことにかまつたことのない先生であっただけ、その変化は生徒に妙にひびかずには置かなかった。ある組が剣道のとときT先生が新校長を案内して何かくどい（そして時々頭をペコペコさげて）説明をしていた。又学校の花畑に蹲みながら得意氣に説いていることもあった。それにT先生の体操時間によく校長先生が見にくることがあった。その時彼は一そう嚴重にそして大きな声で号令をかけた。

今まであらゆることに於て、生徒の味方であつた先生はもう容赦なく生徒のあらを探し、どしどしそれ等を罪した。この事は生徒にとつて一つの不安であり……やがてそれが学校の空氣の動搖にまで行つたのであつた。昼休によく彼は学校中を廻つて歩いた。急いで便所で煙草をもみ消す狼狽が行なわれた。

突然T先生排斥運動が、その町の公会堂で数十名の生徒によつて為されたという、二段ぬきの記事を彼は朝飯の時見た。彼はただ予期していたことが愈々来たという恐怖に眞青になった。自分でもどうすることも出来ないと思つていたのであつた。

それが一月後にT先生は学校を出されてしまった。

「町で会つと、いつもニコニコして行くのだがなあ……学校へくるとああなんだ」

「ああやつてゐるが、何かしら淋しいような陰があつたよ……」

一人がセンチメンタルに云つた。

「俺と会つたとき、校長が変なので、閉口したと云つていた」

と考え深そうに一人が付け足した。

学校では色々の話がなされた。実業団の運動会があつたとき一人がT先生に会つたと云つた。

『お前もストライキをした一人だろう』と淋しく云つたよ。俺は何もしなかったがだまつて笑つた。そして『先生今何処へ行つてゐるんですか』ときいたら『この町であんなことをして、誰が使つてくれるか。が錢がないから運動はしているよ。履歴書は日本中に出してある……』と云つて笑つた。俺も『日本中』という語が可笑しいので笑つたよ……」

（小林多喜二「老いた体操教師」より）

問一 [ア] に最も適当な言葉を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 白色 イ 黒色 ウ 藍色 エ 桃色 オ 緑色

問二 1 10 に適当な言葉をそれぞれ次のア～コの中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一回しか使えません。

ア むらむら イ どたどた ウ パタパタ エ びくびく オ ひりひり
カ ガタガタ キ カチャカチャ ク こつこつ ケ ほかほか コ カサカサ

問三——線部①「さっきの事」は、具体的にはどんな事ですか。本文の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。(句読点・符号も一字とします。)

問四——線部②「腰がずきずきする」理由を文中より六字で探し、「～こと。」に続くかたちで答えなさい。(読点・符号も一字とします。)

問五——線部③「冗談を云った」のはだれですか。文中の語で答えなさい。

問六——線部④「全くこれ見よとばかりに」のあとに続く適当なことば(十二字)を文中より探して書き抜きなさい。

全くこれ見よとばかりに□□□□□□□□□□□□□□□□。

問七——線部⑤「淘汰をする」のこの場合の言いかえとして適当でないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 解雇 イ 解職 ウ 辞職 エ 罷免 オ 免職

問八——線部⑥「うるさかった」と同じ意味のものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手続きがやたらとうるさい。
 イ 車の音がうるさい。
 ウ 客席の話し声がうるさい。
 エ 礼儀にはうるさい。
 オ ワインにはちよつとうるさい。

問九——線部⑦「二人」とはだれとだれのことですか、文中の言葉で答えなさい。

問十——線部⑧「涙がでてきた」理由として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 新らしい校長から淘汰されることに決まっていたいへん悔しいから。
 イ 自分のことをかばってくれた校長が退職してしまうことがとても悲しいから。
 ウ 父親の苦しい胸の内も理解できず子供たちの騒ぐのが情けないから。
 エ 腰がずきずきと痛むから。
 オ 心ならずも新らしい校長の思惑おもわくに従わなければならないのが嫌でたまらないから。

問十一——線部⑨「T先生の態度は一変した」とありますが、「先生」は本質的に変わっていないものと思われます。そのことを示す部分を——線部⑨以降の文章より三か所(いずれも二十字以内)探して書き抜きなさい。(句読点・符号も一字とします。)

問十二——線部⑩「ストライキ」は何のためにおこなわれたのでしょうか。文中の言葉(漢字四字)で答えなさい。

問十三 この小説を書いた作家の別の作品を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 坊っちゃん イ 蟹工船 ウ 友情 エ 高瀬舟 オ セメント樽の中の手紙